

## はじめに

柳本 私自身は以前から、科学的なエビデンスの質の高さと、どのようにすれば質の高いデータが得られるかという点について関心がありました。一方、それは、社会が求めるエビデンスの質とは少し違うのではないかという印象も抱いています。品質管理の領域の言葉で言えば、良い製品を大量に安く提供するという考え方に対して、求められる品質を効率よく提供する方向に考え直そうという気運があります。この気運が1つの参考になるような気がいたします。

その場合、質の高い情報と低い情報があると認識せざるをえませんが、情報の質の高さの程度については、結局は、出てきた結果で質が高いかどうかを判断することになるでしょう。これも品質管理の言葉では、品質を作り込むということ、つまり質の高い情報をどのように作り込むかということに他りません。質の高さは、データを取るときに努力でかなり決まってしまうのではないかと思います。

今日は、安全性とリスク管理におけるエビデンスの質の高さや求められるエビデンスについて考えていきたいと思います。総研大の「科学と社会」研究会では、社会への広報アナウンスはどうあるべきかについて研究しています。普通に考えれば、多くの人は、責任を負える人が認めた情報を提示するのが良いと思っているでしょうし、社会が良い方向に向かう情報が望ましいと思っているでしょう。しかし誰が責任を負うのか、誰がその質を判定するのかなど、問題は単純ではありません。またパニックを起こさない情報の出し方も難しい問題で、多分すべての情報をオープンにすることには無理があるでしょうから、ある程度質の高い情報を出していくのが妥当ということになります。今日お集まりの方は理科系の方が多いと思いますが、文科系の視点から、この点についてまずお話をさせていただきたいと思います。なお司

会は、林衛さんをお願いいたします。

林 ユニバーサルデザイン総合研究所の林です。昨年まで、雑誌「科学」(岩波書店)の編集をしていました。もともとの専攻は地球科学です。まず、最初に、京都女子大学の平川先生にお話をいただき、その後、慶応義塾大学の吉川先生にお話をいただきたいと思います。